杉田真衣著

『高卒女性の12年
——不安定な労働，ゆるやかなつながり』

評者：大澤　真平

1　はじめに

本書は，「若年ノンエリート女性」[1] の「労働と生活の移り変わり」を，長期間に渡るインタビュー調査の知見から明らかにすることを主題としている。『18歳の今を生き抜く——高校1年目の選択』（2006年，青木書店）や『高卒5年　どう生き，これからどう生きるのか——若者たちが今〈大人になる〉とは』（2013年，大月書店）をまとめた東京都立大学／首都大学東京の研究グループに所属していた著者が，その後，単独で高卒後10年目，12年目に行った調査を加えた研究成果である。

著者は課題に取り組む前提として，2000年代以降の「ポスト企業社会」のなかでの若者をとりまく状況の不安定化をあげる。それは〈学校から仕事へ〉の移行の不安定化，雇用の不安定化を背景にした社会関係資本の収縮，ライフコースの二極化といった形で表れているばかりでなく，当事者である若者たちもまた不安定な社会に生きている自分を認識せざるを得ない社会だという。これまでの若者と労働をめぐる研究は正規雇用への移行を標準として規範的にとらえる視点に立つものが多かったが，著者はすでに非正規雇用が「常識」となった認識のなかでの若者の生活と労働を，そこに生きる若者の視点に即してとらえる必要性を訴える。

そのうえで，雇用と関連した若者研究が男性をモデルにしてきたことに対して，「非正規化する雇用」が与える意味が男女によって異なること，さらに女性の家族や地域や学校での社会化といった彼女たちが生きてきた文脈が十分に明らかにされてこなかったことから，「若年ノンエリート女性」に焦点をあてた研究の意義を説く。つまり本書は「不安定化・個人化・階層化・ジェンダー化された社会」における，「若年ノンエリート女性」の現実を実証的に明らかにしようとするものである。

2　本書の内容

本書は大きく序章，Ⅰ部（1章～4章），Ⅱ部（5章～7章），終章にわかれている。Ⅰ部では4名の女性のライフヒストリーから，スナップショットではとらえられない高校卒業後12年間の労働と生活の移り変わりが示される。Ⅱ部では4名の事例を労働と生活の観点から分析している。

序章「若年ノンエリート女性をどのようにとらえるか」では，先述したような問題設定と先行研究の整理が行われる。その際の視点として，著者は雇用とジェンダーに加えて，「後期近代社会と若者の文化・ネットワーク」にも重点を置いており，概念としての「個人化した社会」に対して，実際の若者が作り出す新しい社会のあり方を模索していくことの意義についても言及する。

第Ⅰ部「高卒後，十二年の軌跡——四人のライフヒストリーから」では，具体的なエピソードで4名の女性の高卒後の世界が示される。第1章「先が見えないし長生きはしたくない——非正規雇用で働き続ける庄山真紀さん」，第2章「三〇歳なのに二〇歳みたいに悩んでいる——二〇代後半から芸能の道を歩む西澤菜穂子

さん」，第3章「親がいる限り自由がない――健康問題を抱え姉弟と家計を支える浜野美帆さん」，第4章「結婚一〇周年には親子四人で旅行に行きたい――家族形成を軸にネットワークを広げる岸田さやかさん」と続くが，いずれも高卒後に不安定な雇用状況のもと，それぞれの人生（生活）を形成していこうとする姿が12年間の時間を通して描かれる。

第Ⅱ部，第5章「若年女性たちの労働の姿」では，高卒後12年間の職業履歴から「移行」の経験が分析される。彼女たちの労働は高校在学中から継続しており，従来の学校経由の就職や〈学校から仕事へ〉という枠組みではとらえきれないこと，正規雇用・非正規雇用にかかわらず「現代の職業現場がはらんでいる抑圧性それ自体」が就労の安定的な継続を阻んでいることが指摘される。そのなかで彼女たちはキャリアの大部分を離転職を繰り返しながら非正規雇用で形成していくことになるが，12年という時間軸を通してみると，自分の適性，収入，生活スタイルに合わせた継続できる就労へと，「非正規労働者として生活していくための知恵と技を蓄積して」いく様子が明らかになる。とはいえ非熟練不安定雇用のなかで労働を通じた自己アイデンティティの形成は容易ではないのだが，仕事上の知識や技術を獲得し自分なりに裁量の余地を見いだしていく事例など可能性も示される。

労働といったとき，本書に登場する女性に限らず調査全体として性的サービス労働[(2)]に従事する女性が数多く見られたという。そのため第6章「若年女性と性的サービス労働」では，高卒5年後までの調査を元に，若年女性の就業行動全体のなかに性的サービス労働がどのように位置づき，彼女らがそれをどのように認識していたのかが明らかにされる。そこでは性的サービス労働が「繰り返される非正規雇用の離転職のプロセスの一部として存在して」おり，彼女たちの「生活を成り立たせることのできる収入を確保するための試行錯誤の一環」としてとらえられるという。性的サービス労働は「女性性を売ることの難しさ」や「劣悪な労働環境」から継続的に従事することは困難であり，彼女たちもまた「性的サービス労働は長く続ける仕事だとは認識」していなかった。しかし，一度性的サービス労働から退出しても，相変わらずの不安定雇用のなかで，長期間に渡って性的サービス労働が彼女たちの生活を形作る可能性も見いだされた（実際にその後の12年目までの調査では，性的サービス労働が生活の安定のために重要な位置を占めていることが第Ⅰ部では描かれている）。

第7章「若年女性たちの生活の形」では，家族，学校，地域，消費文化における彼女たちのネットワークに注目して生活のありようを分析している。そこでは，やはり継続が困難な就労状況を背景に，労働を通じたネットワークは見いだされなかった。また，家族は最もつながりの強いネットワークであるものの，不安定な家族は彼女たちの支えになりにくいこと，しかし，家族外部の公共セクター（学校，医療，福祉関係者等）や生活圏を共にする大人が彼女たちの生活を支える地元コミュニティのネットワークとして存在していた。とはいえ，地元コミュニティが自分の世界として実感できるのは結婚・出産を経てそこに埋め込まれていった女性だけである。「標準的なライフコースを前提とした正統的なコミュニティ」に生を肯定されない他の女性たちは，恋愛や消費文化世界（ライブ，コスプレ，テーマパーク等）を通じて形成される関係のなかに自分自身の関係を作り出そうとしていたが，それは生活の基盤を与えてくれるものではなかった。そのなかで，高校時代の友人との「ゆるやかであってもつながり続

ける」ことが，彼女たちの「生の軌跡」を再確認できるネットワークとして存在していたという。

終章「彼女たちのこれまでとこれから」では，まず，12年間という時間軸のなかで彼女たちの選択を理解すると，それはけっして非合理的なものではなく，自分自身の生活を作り出す履歴であったことが述べられる。彼女たちは不安定な生活を仕方のないものととらえており，それを社会ではなく個人の問題として引き受けてしまっているがゆえに，「不安定を所与」としたなかでよりましな生活を作ろうとしていた。そのなかで，地域コミュニティにも埋め込まれず消費文化世界でも安定を得られない彼女たちは，同じような状況にいる高校時代の仲間とゆるやかにつながることで同時代性を認識し，「何が標準であるか」わからない社会状況のなかで自分たちの「確認」を行っていたという。著者はそこに彼女たちの〈社会〉が形成される可能性を見いだしたいという希望を述べ本書を締めくくる。

3　本書の意義と課題

本書の特徴は，なんといっても12年間という長期に渡り，今を生きる若者の「移行」の経験を具体的に示したことにある。不安定化する時代の若者や労働に関するスナップショットからの議論や評価は数多くなされているが，当事者の視点に寄り添い実際の移行期を共にしたうえで分析がなされたことに大きな意義がある。

若者の不安定化については非正規化する雇用・労働の面から分析され，女性労働の問題については非正規雇用と性別役割分業の関係がこれまでも指摘されてきた。またライフコース研究では量的調査によって不安定化するライフコースイベントとそれに影響を与える変数が示されてきた。しかし，本書の質的かつ長期に渡る研究によって，初めてそこに生きる当事者のリアリティが時間軸を持って浮かび上がってきたと言えるだろう。特に彼女たちが不安定化した時代の構造に制約され翻弄されながらも，「なんとか生活を営み自分自身を維持する」ために，非正規雇用と性的サービス労働の間で離転職を繰り返す様子を明らかにしたことは本書の大きな成果である。今後，不安定化する若者の生活実態を語るとき，性的サービス労働へ誘引する構造を批判的に検討することは必要だが，彼女たちの性的サービス労働への従事を規範的に非難することはできないだろう。長期に渡る試行錯誤をとらえたからこそ，当たり前の生活維持者としての彼女たちの「合理的選択」が軌跡づけられた。著者の「若者をめぐる規範的な認識と格闘し，彼女たちの労働と生活を彼女たちが生きる文脈に即して解釈」したいとの姿勢が，本書の成果につながっているのだろう。

また，本書は貧困・不平等の経験について私たちの理解を深めてくれる。たとえば，これまでの貧困・不平等研究で示されてきた本人や家族の疾病や障がいなどの脆弱性，学歴や職業や家族構成の不利，失業や離婚や借金などの困難の累積といった事柄が，どのように長期的な個人のライフコースと結びつくのかという点である。ほかにも貧困の経験の持続性という点で興味深い知見が示されている。欧米のパネル調査の結果では，長期間に渡って貧困のなかに置かれているケースより，貧困層と低所得層の間を行き来しながら断続的に貧困の経験を持つケースの方がむしろ多い。本書での彼女たちも離転職を繰り返しながら貧困・低所得の行き来を経験しており，その時々の状態のなかで彼女たちの「選択」が行われていく様子がわかる。当たり前の生活から低所得・貧困に至るまで実際には人々の生活はグラデーション様に存在しているが，本書はその一部を今を生きる若者の経験

として確かにとらえているように思う。

このように本書は二極化した若者のライフコースのうち，より不利と困難に置かれた側の実態をとらえ，そのなかで当事者がどのような生活（人生）を作り出していきたいのかを丁寧に追いかけた労作である。特に著者は，選択肢が剝奪され低位に置かれた生活を余儀なくされる犠牲者としてではなく，当事者の視点からその生活の意味を見いだしていきたいとのスタンスを取る。そのことを踏まえたうえで，評者の関心から気になった点を述べたい。

ひとつは「不安定を所与」としてきたという認識の解釈についてである。著者はギデンズやファーロングの議論を参考に，当事者である若者たち自身も不安定な社会に生きていることを認識しており，自分自身の境遇を自己責任として引き受け，不安定を所与として生きてきたと述べる。しかし，このような認識は果たして彼女たちが高校卒業の最初から抱いていたものなのだろうか。つまり，彼女たちの移行の経験の結果として語られた認識を，移行の当初から抱いていた認識として解釈していないだろうかという点である。

当事者が不安定な社会を生きることを認識することは，研究者が客観視している不安定雇用のなかを当事者が自覚的に生きることとは異なる。先の見通しに階層による不平等は当然あるのだが，それでも自分の先がどうなるかは経験してみなければ誰にもわからないし，事後的にしか自分の軌跡を解釈して理解できない。それがライフヒストリーとして語られるのである。親世代の不安定さを見ながら育ち，学校教育のなかで恵まれた労働に従事できない可能性を再三聞かされ，実際に働き始めて不安定な生活を余儀なくされるなかで，彼女たちは自虐的に「ニート」「フリーター」「ネットカフェ難民」などと自らのことを語ることがあるかもしれない。しかし，問題はそのような社会に流布する外的な評価を仮に自分に当てはめることではなく，長期間に渡る移行の経験のなかで「非正規労働者として生活していくための知恵と技を蓄積し」ながら，やがて不安定な状態で生きていく自分を仮ではなく受け入れていく過程にある。彼女たちは「不安定を所与」とする生活をどのように日常として受け入れ，自分の人生を納得し折り合いをつけていくのだろうか。

「個人的なライフヒストリーは社会的に形成されるが，同時にそれ自体が埋め込まれた社会関係をも形成する」（ダウジーン 2013）[(3)] とは，このようなプロセスを経て形成されていくものであろう。そうであれば「不安定を所与」とする生き方を受け入れていく過程で，高校時代の友人ネットワークがどのような機能を果たしていたのか，あるいはその意味合いがどのように変化していったのか，彼女たちの〈社会〉についての理解を深めるために，そのような時間軸による分析がなされてもよかったのではないか。

もうひとつは，ジェンダー分析の視点についてである。ライフコースと個人化の問題のなかでは，性役割やジェンダー関係の多様化の実際がひとつの論点となっている。本書でも「結婚それ自体が難しくなっていた」と述べられるように，そのトピックのひとつとして未婚化の問題があげられる。この点に関して，著者は彼女たちと関係を持つ男性もまた不安定化し，かつ，互いを尊重し合うまっとうなパートナーシップを取り結ぶことが難しい現実を指摘している。また，結婚が現実的な生活の術となりうる反面，それを「自立」のかたちととらえることには議論があることも述べられている。しかし，せっかく具体的なエピソードで示された彼女たちの恋愛や結婚に対する葛藤や悩みをもう少し分析的に記述することがあってもよかった

のではないだろうか。

性別役割分業に適合的な生き方をすることで安定が生み出される社会構造のなかで「新たなライフコース」のひとつの形態として未婚で生きていくことが「選択」できるのは限られた女性だけである。本書のような「若年ノンエリート女性」は一人で生きていく手段が無いゆえに結婚願望の葛藤から逃れることが難しい側面がある。そういう点で彼女らが自らの人生を生きていくなかでの労働と結婚の位置づけをどのように解釈しているのかを関連付けて分析することが必要だったように思う。特に先述した不安定な状態で生きていく自分を受け入れていく過程と合わせて，彼女たちが結婚を前提としない生き方をどのように想定し受け入れていくのか，彼女たちの労働と結婚の位置づけの変化を分析的にとらえることがあれば，「労働市場の不安定化が女性に与えた意味を固有に追及していくこと」という著者の目的の答えがよりクリアになったのではないだろうか。

以上，評者の関心から若干の議論を行ったが，むしろこのような説明的な見方を相対化する試みとして本書の価値があるようにも思う。いずれにしても本書は質的調査として今を生きる若者の生活をとらえており，当事者の立場に立つ側の視点から数多くの示唆を与えてくれることは間違いない。聞き取りはこれからも続けられるという。本書の続編もまた期待したい。

（杉田真衣著『高卒女性の 12 年――不安定な労働，ゆるやかなつながり』大月書店，2015 年 7 月，239 頁，定価 2,500 円＋税）

（おおさわ・しんぺい　札幌学院大学人文学部准教授）

---

(1)　著者は，「ノンエリート」は多くの含意を含む概念だと断ったうえで，ひとまず「非大卒」として扱っている。

(2)　本書における「性的サービス労働」は，「飲食店で客の求める女性性を演出しながら接待をする仕事（スナック・クラブ・キャバクラ・セクキャバ），身体接触を中心に性的なサービスをする仕事（ファッションヘルス），電話やメールを介して性的なコミュニケーションを行う仕事（テレクラ・チャットレディ・出会い系サイト）など，性的なサービスによって対価を得る仕事のすべて」と定義されている。第6章では彼女たちが性的サービス労働の内と外や，内部の境界線をどのようにとらえているかなども明らかにされている。

(3)　ダウジーン（2013）「ライフコース・ライフストーリー・社会変動」田中洋美，M. ゴツィック，K. 岩田ワイケナント編『ライフコース選択のゆくえ――日本とドイツの仕事・家族・住まい』新曜社。